

タックス・チュータリング 代表 中村 岳昭 氏 (高校39期)
ブリスベン国際日本語学校 校長

◆◆ オーストラリアへLet's 豪 ◆◆

将来、どこで何をしているかなんて、高校生のときは全く分からなかった。でも、先が見えないからこそ楽しいのかもしれない。私は今、真夏のオーストラリアにいる。

大学1年の夏、念願だったアメリカ横断ウルトラクイズという番組に出ることができた。東京ドームを敗者復活(!)で勝ち抜き、海外はおろか、飛行機にも乗ったことのない私は、「運」の強さだけでグアムへ。「グアムの後はオーストラリアだ!」とワクワクしながらクイズを解いたが、「運」頼みもここが限界。一泊して、即帰国することになった。しかし、立高在学中あれほど嫌いだった英語も、グアムで使ってみると「あれっ、話せば通じるものだなあ」と遅ればせながら、英語の先生に感謝した。このとき、次なる「やりたいこと」が芽生えてきていた。

自分には端から無理と諦めていた留学を、今更だが挑戦しようと決意した。大学の学長室のドアを叩き、「海外で研究をさせてください」と直談判。「うちには留学制度はないけど、いい話があるんだ。やってみるかね?」と、交換留学の機会を頂いた。

1年という短い留学であったが、私の価値観はかなり変わった。海外の友達との会話は、エリート企業就職という尺度ではなく、専ら「何がしたいか」というものであった。たくさんの多様性、あふれる「やりたいこと」。そのために自分自身の「中身」を磨こうとする姿勢。留学の一番の収穫は、このことだったかもしれない。

帰国後、ベンチャーのコンサルティング会社に就職、親からは「そんな会社、大丈夫?」と本気で心配された。しかし、小さな組織である故に、「やりたいこと」は提案すれば挑戦できた。10年が過ぎたころ、コンサルタントとしての経験を次の「やりたいこと」に活かしたいと思うようになった。家業である「塾」である。自分の子どもたちのように、2つの国、2つの言語・文化を身につけようと頑張っている子どもたちを支援する仕事。そう考え12年前にオーストラリアに移住、帰国子女のための塾と、ブリスベンのバイリンガル向けの土曜学校を設立した。海外での起業、英語での交渉、商慣習の違いなど試行錯誤の連続だった。しかし、自力で一つずつ問題をクリアしていくのは、まるでクイズ番組(!)のようであり、それ以上にエキサイティングだった。

皆さんが現在、立高で培っている「やりたいことの種」は卒業後に芽が出るかもしれない。人と違うことをするのは勇気がいることではあるが、ぜひ上手に育ててほしい。視野を広くして、機会があれば、海外(特にオーストラリア!)で挑戦してほしいと願っている。

☆ブリスベン国際日本語学校の公式サイトはこちら

<http://www.nihongo.net.au/bisj/>

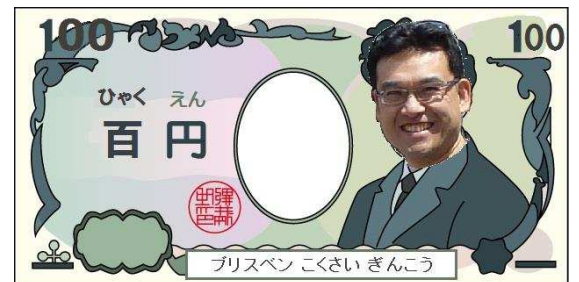
☆Facebookのページでは授業風景などをご覧いただけます

<https://www.facebook.com/kokusainihongogakkoubisbane>



入学式

クラスの組み分けはハリーポッターの組み分け帽子を使う



100円券

いい解答をすともらえ、校内のお祭りなどで使える



ブリスベン国際
日本語学校



Facebook